

アウトリーチ活動による参加学生の意識変化に関する研究

—小学校出張授業を事例として—

Consciousness change of graduate students as a professional through outreach activities

-A case study of “Bokura ha machi no tankentai ” in Uehara elementary school-

科学技術インタープリター養成プログラム 5 期生
工学系研究科建築学専攻村松研究室 修士 2 年 原田 萌
指導教官 黒田 玲子先生

アウトリーチ活動による参加学生の意識変化に関する研究

一小学校出張授業を事例として一

科学技術インタープリター養成プログラム 5 期生

工学系研究科建築学専攻村松研究室 修士 2 年 原田 萌

指導教官 黒田 玲子先生

現在、大学の研究室や研究機関で研究内容や成果を一般市民（分野外の人）に発信するためのアウトリーチ活動が活発に行われている。その多くは専門技術や研究の紹介といった「専門家（学生）→市民」一方向に主眼がおかれ、いかにわかりやすく伝えるか、楽しんでもらえるかといったことが重要視されている。しかし私自身、アウトリーチ活動に参加する中で、一般市民との価値観の差異や人に伝えることの難しさを実感し、新たな視点や考え方を手に入れたことが何よりの収穫であったと感じている。そこで、本研究では主に「市民→専門家（学生）」の方向に着目し、アウトリーチ活動に参加した学生が子どもたちとの交流を通してどのように意識が変わったのかを明らかにすることを目的とする。

本研究で対象とする活動は、東京大学生産技術研究所村松研究室が、近隣の渋谷区立上原小学校と共同で 6 年間継続して行ってきた総合学習の授業「ぼくらはまちの探検隊」である。参加者と小学校双方へのアンケートから成果と改善点を把握する。

隊長として参加した学生、過去 6 年間で全 40 名へのアンケートを行い、25 名から回収した。内容は、参加理由、反省、視点の変化、成長、現在の職業や仕事への影響等、選択式にし、選択理由を記述してもらった。活動期間中の成長といった短期的なものだけでなく、その後の研究や仕事への影響といった長期的な変化まで明らかにするため、数名へは、追加インタビューも行った。

今年度と昨年度の担任の先生 2 名へのアンケートとインタビューによって、活動を通しての児童の成長と視点の変化、活動の問題点や、小学校側への負担等の改善点を伺った。

アンケートの結果、アウトリーチ活動に参加することにより、学生には、コミュニケーション力等の方法面だけでなく、自分の専門分野の理解促進や思考の整理といった研究への直接的な効果もあることが明らかになった。参加者のほぼ全員が参加して良かったと回答しており、参加経験が現在の職業や研究にも生きていた。担任の先生方へのインタビューにより、本活動を行うことによって、小学生にも、自信をつけた、学習意欲の向上、視点や発言の変化、地域との交流の創出といった良い影響がある一方で、学生と小学校の価値観の差異や、小学校側の負担、学生の負担等改善すべき点も明らかになった。

これらの成果と、改善点を元に、より良いプログラムを作成し、活動を普及させていきたい。

Consciousness change of graduate students as a professional through outreach activities -A case study of “Bokura ha machi no tankentai” in Uehara elementary school-

The aim of this study is to improve and activate outreach activities.

Recently, the outreach activities are popular among university students and researchers. Though the number of the activities has increased, most of them are only one directional, i.e., from professionals (university students and researchers) to general public. However, professionals should also learn from the participants.

In Muramatsu laboratory, Department of Architecture, Faculty of Engineering of the University of Tokyo, where I a master student, outreach activity “Bokura ha machi no tankentai” have been carried out by the graduate students for the last six years.

In this study, I have focused on consciousness change achieved through the outreach activities, by carrying out a questionnaire survey to the students, children and school teachers who participated in the past. I could prove a consciousness progress of the students as professionals and the children as participants.

【目次】

序章 研究を始めたきっかけ	1
0.1 研究背景	
0.2 建築分野におけるアウトリーチ活動	
0.3 目的	
0.4 調査方法と論文構成	
1 章 「ぼくらはまちの探検隊」について	3
1.1 活動の歴史	
1.1.1 活動の始まり	
1.1.2 活動の目的	
1.2 活動の概要	
1.2.1 活動体勢	
1.2.2 スケジュール、一日の流れ	
1.2.3 これまでの探検内容	
1.3 小結 活動の特徴	
2 章 活動参加による学生の変化	8
2.1 調査、分析方法	
2.2 集計結果	
2.2.1 参加者の属性	
2.2.2 参加理由	
2.2.3 活動成果	
2.3 参加者の属性別	
2.3.1 参加理由別	
2.3.2 アウトリーチ活動参加有無別	
2.3.3 参加時の所属別	
2.4 参加年次別	
2.5 現在の職業、研究への影響	
2.6 小結 活動参加による学生への影響	
2.6.1 参加者の属性別	
2.6.2 参加年次別	
3 章 小学校側から見た活動評価	13
3.1 アンケート方法	
3.2 児童の変化	
3.2.1 活動を通しての成長	
3.2.2 児童の都市、建築に対する興味	

3.3 改善すべき点	
3.4 小結	
4 章 結論	15
4.1 まとめ	
4.2 今後の活動	
∞1 謝辞、あとがき	16
∞2 インタープリター養成プログラムを通して	17
参考文献、図版一覧	18
付録	19
・ 指令一覧	
・ アンケート見本	
・ アンケート結果一覧	

序章 研究を始めたきっかけ

0.1 研究背景

近年、大学の研究室や研究機関がその研究内容を一般市民に発信、交流するためのアウトリーチ活動¹が活発に行われている。しかし、その内容には技術や研究の紹介といった専門家側から、一般市民側への一方向の矢印に主眼がおかれているものが多く、その内容も、「いかにわかりやすく伝えるか」「いかに興味を持ってもらえるか」といったことが重要視されているように感じる。しかし私は、アウトリーチ活動の意義は、「専門家→一般市民」だけではなく、「一般市民→専門家」も含めた、双方向性にあると考える。私自身様々な活動に参加する中で、建築分野以外の人との価値観の差異や、難しい言葉でごまかさずに人に伝えることの難しさを痛感するとともに、新たな視点や考え方を手に入れたこと、建築を客観視できるようになったことが何よりの収穫であった。そのため、後者である「一般市民→専門家」の矢印がとても重要であると感じている。また、一部の意欲的な専門家によって企画され、参加する人々も、もともとその分野に関心の高い一部の一般市民である場合が多く、活動が社会全体に広く伝わっているとはまだ言えないだろう。

0.2 建築分野におけるアウトリーチ活動

私の専攻する建築分野では、一般市民との関わりなくしては成立しないため、ワークショップや公開講座等と言った活動は盛んに行われてきた。また、建築、都市は、他の分野と異なり、一般の人々にも目に見える形で成果が現れるため、影響は大きく、他の分野に比べて一般市民の関心は高いと言えよう。

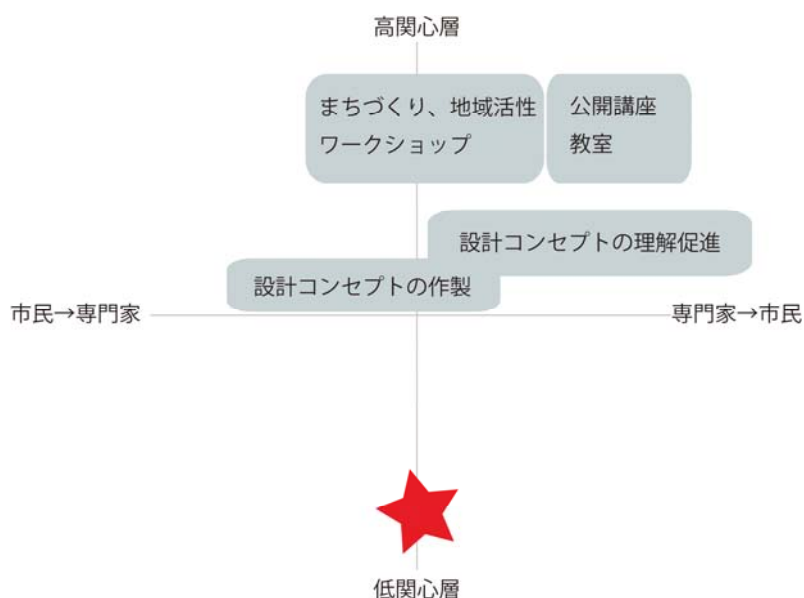


図 0-1 建築分野における一般市民との関わりの位置づけ(筆者作成)

¹文部科学省『平成 19 年度版科学技術白書 科学技術の振興の成果—知の創造・活用・継承』p.298 では、「科学技術におけるアウトリーチ活動とは、わかりやすく親しみやすい形で人々に科学技術を伝え、対話を通して人々の要望や不安を組み取り、また自らの科学技術研究活動に反映させていくこと」と定義されている。

図 0-1 に建築分野で行われている一般市民との交流活動をその目的別に分け、位置づけを配置してみた。横軸にはその活動における専門家と一般市民との関係、縦軸には、参加する一般市民の問題意識や関心の度合いを表す。ここでは、『新建築』2002 年 7 月号の特集「ワークショップと建築家の役割」に掲載されていた活動を参考に、建築家と市民の関わり方を 4 つのタイプに分類した²。

- ・ まちづくり、地域活性ワークショップ

地域活性化やまちおこし等、自治体や NPO、住民団体によって企画され、建築家が専門家、アドバイザーと呼ばれるもの。

- ・ 公開講座、教室

建築家による模型づくりや建築ツアー、建築史家によるまちの歴史解説等。

- ・ 設計コンセプトの理解促進

建てられた建物を市民に紹介したり、新たな使い方を見いだす為に行うもの。

- ・ 設計コンセプトの作成

建築を建てる前に、その利用者と共にワークショップや議論を行う。その目的は、デザインの方針を決めたり、用途を明確化したりするものである。

0.3 目的

このように、建築分野では、一般市民と交流する活動自体は盛んに行われているものの、図 0-1 を見ると、やはり建築、分野でも一部の専門家による、一部の市民に向けた活動が多いと感じる。しかし私自身、アウトリーチ活動を通して、一番の収穫であったと感じるのは、一般市民や他の参加学生との交流を通して得た新たな視点や価値観であり、図 0-1 の赤い★印の位置にあるような活動が理想的であると考えた。そこで、本研究では、アウトリーチ活動を行った研究者、学生側の変化を調べることで、「研究者側も成長する」というアウトリーチ活動の一面も明らかにすることを目的とする。

0.4 調査方法と論文構成

本研究では、私自身が 3 年間企画運営に携わってきた小学校での出張授業「ぼくらはまちの探検隊」という活動を対象とする。

1. 歴代参加学生へのインタビュー

2. 小学校担任へのインタビュー

によって、活動を通しての双方の変化や成長、活動の改善点を明らかにしたい。

² 「ワークショップと建築家の役割」 『新建築』 第 77 巻 8 号 2002 p.134～p.143

1 章 「ぼくらはまちの探検隊」について

1.1 活動の歴史

1.1.1 活動のはじまり

本活動は東京大学生産技術研究所の村松研究室が、近隣の渋谷区立上原小学校と共同して行ってきた教育活動である。その始まりは 2004 年、海外調査を行う一方で、自分たちの生活する地域に対して何も知らないこと、建築という狭い世界、室内で閉じた研生活への疑問を感じた村松教授と村松研究室の先輩方の発案であった。近隣の小学校いくつかへ相談をし、意欲的に協力してくれた校長先生のいた上原小学校で行うこととなった³。

以降、上原小学校では 6 年生の総合学習の授業として毎年行われてきた他、2006 年には浜松市立船越小学校、東京都中央区立佃島小学校、2008 年には渋谷区立笹塚小学校でも 1 日～3 日という短期間でプログラムを実施した。活動は、隊長となる主要メンバーと、副隊長や映像班の学生併せて 20 名程度で行う。村松研究室の学生が主体となって企画しているが、呼びかけによって他大学の学生もこれまで多く参加している。



2005 年上原小学校



2006 年上原小学校



2006 年船越小学校



2007 年上原小学校



2008 年上原小学校



2008 年笹塚小学校



2009 年上原小学校



2010 年上原小学校

図 1-1 これまでの活動

³ 本活動が誕生した経緯については、以下の村松氏の連載に詳しく掲載されている。

「地球の大きな樹の下で」『ソトコト』 木楽舎 2005 年 2 月号、no.68、p.114-117 4 月号、no.70、p.110-113
7 月号、no.73、p.117-121 8 月号、no.74、p.125-129

1.1.2 活動の目的

本活動は、単なるワークショップではなく、子どもたち、学生が共に「まちリテラシー」を学ぶことを目的とした教育活動である。

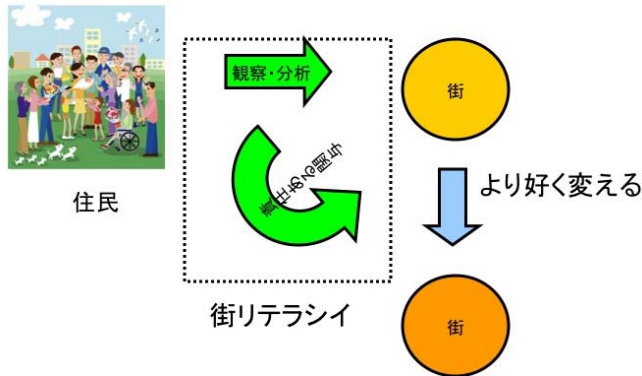


図 1-2 まちリテラシー概念図(筆者作成)

「まちリテラシー」とは、本活動で定義した言葉であり「まちを見る目」、まちを自分の者として捉え、まちにある様々なもの、こと、その関係を理解し、より良くする為に自ら責任を持って関与するスキルのことである（概念を図 1-2 に示す）。建築や都市を学ぶ学生は、専門家としての視点から、子どもたちは住民の視点から共に観察、議論する中で、互いにまちリテラシーを養う。その他に、以下の 4 つの目標がある。

1.街リテラシー（urban literacy）教育プログラムの開発研究

- ・まちをよくするためには、まちを理解し、責任もって関与する仕方を学ぶ必要があることの検証を行う。
- ・小学生へのまちリテラシー教育を実践する。

2.都市解析、研究手法の開発

- ・研究の元となる、都市を分析する新しい見方を開発する。
- ・大学院生の都市理解のための教育プログラムを開発する。

3.大学院学生の教育実践

- ・机上の理論、頭でっかちな都市理解から脱却する。
- ・他分野の視点を知る、トータルな都市理解の手法を獲得する。
- ・社会との連携方法を習得する。

4.地域との結びつき

- ・大学とその地域との関係作りのモデルとする。

1.2 活動の概要

1.2.1 活動体勢

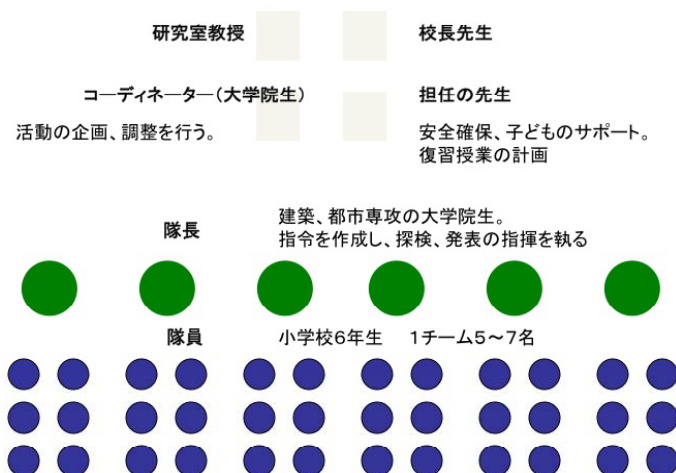


図 1-3 活動体勢の模式図(筆者作成)

活動は、図 1-3 に示すような体勢で行われている。村松教授と校長先生の協力のもとで、実際の運営をコーディネーターの学生が行う為、活動の方針や質の担保はコーディネーターの学生(隊長経験者)が担う。各隊長の考えた探検テーマ(指令)は子どもたちへは、村松教授扮する博士からの指令として伝えられる。

チーム数は児童の人数によって変化するが、毎年ほぼ 6 チームである。隊長の他には、サポートを行う副隊長(各チーム 1、2 人)と映像で記録する撮影隊(3 名)の学生がいるが、この中には建築以外を専攻する学生もいる。

1.2.2 スケジュール、一日の流れ

活動の年間スケジュールの概要は以下の図 1-4 の様になっている。

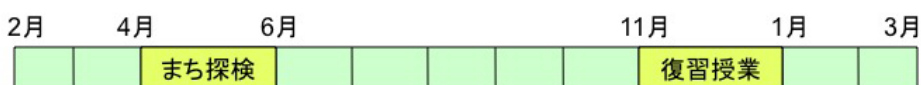


図 1-4 年間スケジュール(筆者作成)

まち探検授業＋発表会(40 時間)

1. 3 月に参加学生を決定、それぞれが指令(テーマ)を作成し、授業計画をたてる。
2. 4 月下旬に行う第一回目の授業で子どもたちと対面、チーム結成し、指令を発表する。
3. 探検授業を 4 時間×10 回程度行う。その中で、古地図の読みかた、地形模型の作製方法を教え、分析議論も行う。
4. 発表会に向けて、探検成果をまとめ、成果物を作成する。
5. 5 月末に行われる東京大学生産技術研究所のオープンキャンパスで発表会を行う。

復習授業(10 時間)

6. 11 月～12 月にかけて、復習授業を行う。他のチームの視点やチームごとの考え方の違いについて議論する。方法は毎年異なり、ディベートやゲーム等を行う。

探検授業の時間割は以下の表 1-1 のようになっている。ここでは、2009 年度の日程の例を示す。一日 4～6 時間を用い、週 1、2 回行われる。この表はあくまでも一例であり、探検時間の使い方は各隊長に任されている。

表 1-1 探検授業のスケジュール(筆者作成)

	4/25	5/1	5/8	5/14	5/15	5/21	5/22	5/28	5/29	5/30
1	ガイダンス	探検	街の模型制作	探検	古地図の読解	探検	まとめ	発表準備	発表準備	本番
2	自己紹介	探検	街の模型制作	探検	まとめ	探検	まとめ	発表準備	発表準備	
3	探検	探検	街の模型制作	探検	まとめ	まとめ	まとめ	発表準備	発表準備	
4	探検		街の模型制作	探検		まとめ	まとめ	発表準備	発表準備	
5							まとめ		リハーサル	
6							まとめ		リハーサル	

1.2.3 これまでの探検内容

これまでに、40 名の学生が参加し、40 の指令（テーマ）で探検が行われてきた。（その例は巻末に添付する。）幾つか例を挙げて探検内容を紹介する。

- ・ 指令「まちとぼくらをきずなで結びなさい」

まちの中の場所やものとの思い出を見つけ、それらとの関係を考察する。探検で見つけた、まちの様々な場所やものとの絆の強さを、インタビューや一人一人の思い出によって計測し、きずなデータシートと絆マップで表現。その場所と、これからどの様な関係を築いていったら良いか、絆をより強く結ぶ為にはどうしたら良いか考察した。

- ・ 指令「川のフタをあけなさい」

かつては水と共に生活してきたまちの水辺環境について考えるもの。探検では、今は暗渠されて見えなくなった川が現在のまちに与えている痕跡、地形から川の位置を見つけ、地域の人々へのインタビューや開渠部分の観察によって、かつての川の様子を想像した。開渠と暗渠の是非を考え、発表会では開渠したまちの様子を再現した。

- ・ 指令「まちのつぎはぎをみつけなさい」

探検では、道路工事の跡や、新しく建てられた建物や塀など、まちにある様々なつぎはぎを発見し、その背景を考えていった。構造物が常に更新されながら、まちが成り立っていることを学び、発表会では、子どもたちの考えた良いつぎはぎを模型に表した。



図 1-5 活動の様子

1.3 小結 活動の特徴

本活動の特徴は以下の 4 点である。

- ・ 隊長としての参加学生は、全員、都市工学または建築学専攻の学生である。
- ・ テーマ、内容は隊長となる学生が、自らの専門分野と問題意識に基づいて作成する。
- ・ 一般のアウトリーチ活動と異なり、小学校の教育活動の一環として行われており、都市や建築に興味の無い児童を対象としている。
- ・ 一回限りで終わるのではなく、年間 50 時間を使って計画される。また、今後も小学校と連携して続けていくプログラムである。

2 章 活動参加による学生の変化

2.1 方法

2004 年度～2010 年度までの、隊長としての参加学生 40 名に対してアンケートをメールで送信し、25 名から回収した（回収率 62.5%）。質問は、選択式（複数選択可）にし、その選択理由を記述してもらった。足りない部分については、数名へ直接インタビューも行った。（アンケートとその結果概要は巻末に添付する。）アンケート内容は以下のものである。1～5 では参加者の属性について、6～10 では活動を通しての変化を、11 では現在への影響を聞いた。

1.現在の職業、所属

2.参加当時の所属

3.参加理由（1 教授に頼まれて、2 興味があった 3 研究のみの生活への不満、4 その他）

4.他のアウトリーチ活動経験

5.探検テーマとその理由

6.活動内容の反省（1 テーマ、2 知識、理解不足、3 準備不足、4 方法、5 子ども）

7.参加して良かったかとその理由

8.活動中の困難（1 テーマ策定、2 内容の計画、3 時間や体力、4 子ども、5 その他）

9.活動参加による成長

（1 新たな視点、2 責任感、3 伝える力、4 思考の整理、5 子どもへの接し方）

10.活動前後での視点の変化

（1 変化無し、2 様々な側面、3 目につくもの、4 嗜好や価値観、5 研究テーマ、6 その他）

11.現在の研究、職業への影響

2.2 集計結果

2.2.1 参加者の属性

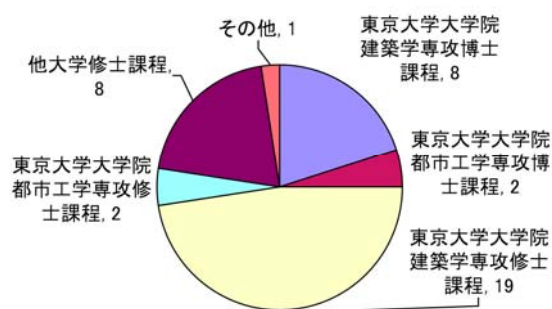


図 2-1 参加学生の属性

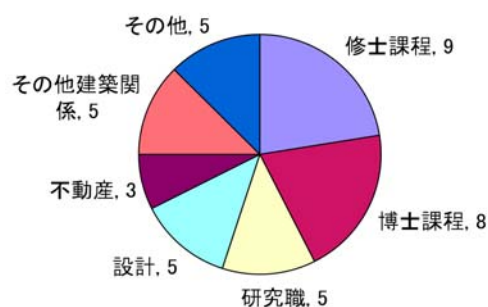


図 2-2 参加学生の現在の所属

参加学生の属性を図 2-1 に示す。図 2-1 のみアンケート未回答者も含んでいる。研究室が主体となって企画している為、その所属学生である修士課程での参加が多いが、誘われて興味を持ったり、ポスターを見て自ら応募した他大学や他学部の学生もいる。

図 2-2 は、参加者の現在の所属を表す。まだ学生である人も多いが、大半は、その建築や都市の専門職についている。

2.2.2 参加理由

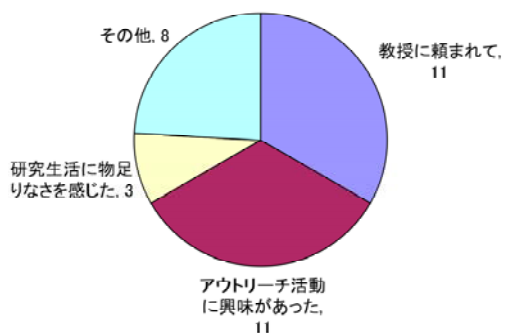


図 2-3 参加理由



図 2-4 他のアウトリーチ活動経験

図 2-3 は参加理由を表す。教授や友人に頼まれて参加の人が 17 名、自主的に参加した人が 8 名である。また、頼まれて参加した 17 名のうち、13 名は頼まれた当初「楽しそう」と感じた一方で、4 名が「始めはいやいや参加した」と答えている。

図 2-4 をみると、25 名中 16 名が、他のアウトリーチ活動への参加経験があった。この理由として、やはり建築学科ではワークショップ等、一般の人々との関わる機会が多く設けられているためと考えられる。

2.2.3 活動成果

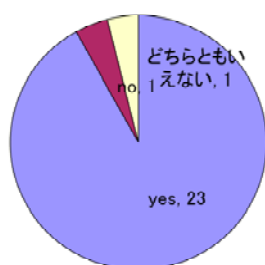


図 2-5 参加して良かったか

図 2-5 を見ると、参加者のほぼ全員が参加して良かったと答えている。また、どちらとも言えない、参加しなければ良かったと答えた 2 名とも、自主的に参加した人であった。参加しなければ良かった理由としては、体調を崩して迷惑をかけてしまったこと、どちらとも言えないと思う理由としては、準備が不十分なまま始めてしまった自分への反省であった。

参加して良かった理由としては、人に教えることで、自分の考えを整理するきっかけになったというものや、まちを自分の問題として考えるようになった、他の研究室の学生と交流することで視野が広がった、子どもたちの「おもしろくない、分からない」といった素直な反応が見られ、自分の疑問や興味を他人と共有する難しさと面白さを知った等の意識の変化や成長が挙げられた。

2.3 参加者の属性別

アンケート結果を、参加者の属性ごとに分析してみる。

2.3.1 参加理由別

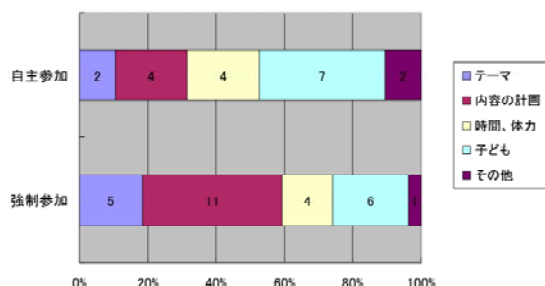


図 2-6 活動中の困難

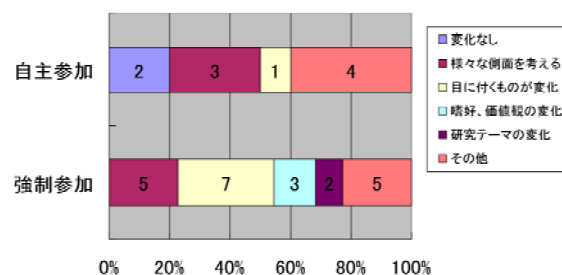


図 2-7 活動前後での視点の変化

自主的に参加した 8 名と頼まれて参加した（強制参加）17 名に分けて、活動の効果を比較する。図 2-6 では、活動中の困難だった点の違いを考察してみる。自主的に参加した人では、時間や体力、子どもとの接し方といった実行段階での負担が多く、頼まれて参加した（強制参加）人では、テーマの策定や計画と言った実行段階での負担が大きかったようである。この理由は、自主的に参加した人は元々問題意識を持っていることが多いこと、他の活動に参加経験があり、計画を立てることに慣れているのではないかと考えられる。図 2-7 では、活動前後での視点の変化を見てみる。自主的に参加した人に比べ、頼まれて参加した（強制参加）人は、視点や価値観の面での大きな変化が見られたようだ。

2.3.2 アウトリーチ活動参加有無別

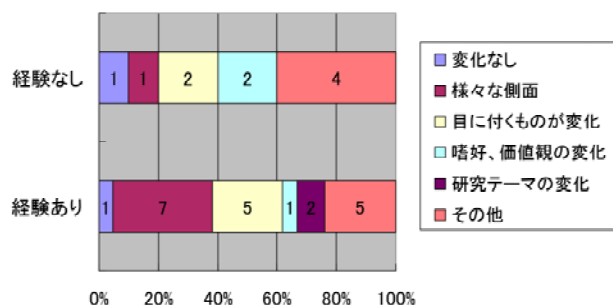


図 2-8 活動前後での視点の変化

他のアウトリーチ活動に参加した経験のある人 16 人、無い人 9 人に分け、本活動の参加前後での視点の変化を比較したものが図 2-8 である。他の活動経験者では、多様な視点、他の側面を知った等、自分自身の変化を答えた人が多い。初めて参加した人の回答の「その他」の中には、「子どもたちが想像以上に興味を示してくれた反面、そのまま鵜呑みにしてしまうため、教えることの責任を感じるようになった」「子どもたちのレベルの高さを知った」等、子どもとの接触による変化が多く見られた。

2.3.3 参加時の所属別

次に、参加時の所属が博士課程だった 6 名、修士課程だった 19 名に分けて比較してみる。

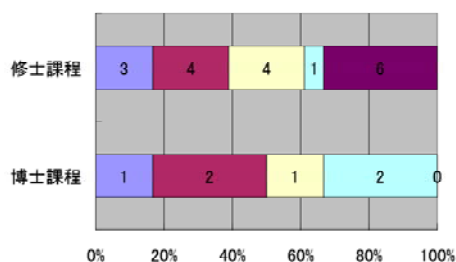


図 2-9 活動を通しての成長

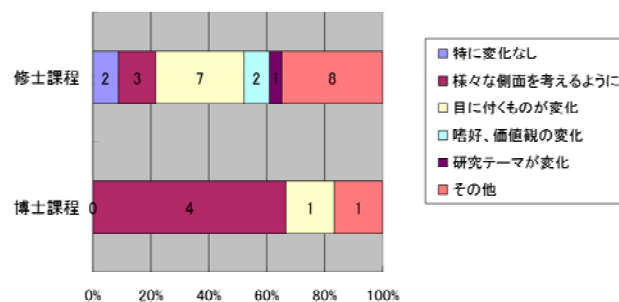


図 2-10 活動前後での視点の変化

図 2-9 を見ると、修士課程の学生は、子どもへの接し方や伝え方と言った方法の面で成長したと答えた人が多いのに比べ、博士課程の学生は、思考や責任感といった意識の面での成長を答えている。博士課程と修士課程の比較から、専門分野の知識量や理解の深さが自信となって、子どもへの接し方、伝え方にも影響していると言えるのではないかな。

また、図 2-10 の活動前後での視点の変化を見てみる。修士課程の学生では、目につくものが変化したり、中には価値観や研究テーマが変化したと答えた人もいる。それに比べ、博士課程の学生では、新たな視点ではなく、すでに自分の持っているテーマの新たな側面を知ったようである。

2.4 参加年次別

次に、参加年次別に 2004 年度～2007 年の初期の参加者 9 名、2008 年度～2010 年度の近年の参加者 16 名に分けて、参加後時間が経過してから感じる成長と、参加直後に感じる成長とに違いがあるのか比較していく。

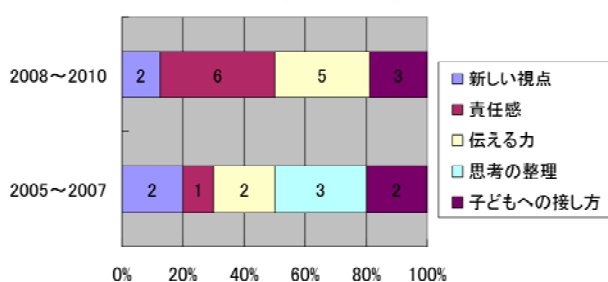


図 2-11 活動を通しての成長

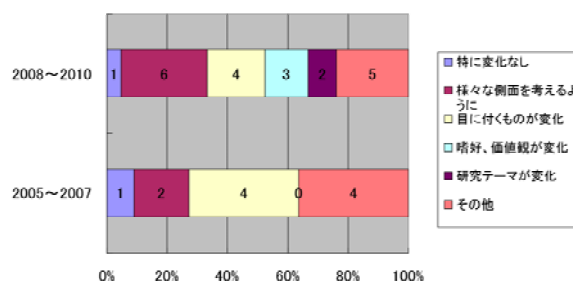


図 2-12 活動前後での視点の変化

図 2-11 は、活動を通して成長した点である。近年の参加者では、責任感や伝える力といった方法面での成長を実感したという人が多く見られる。初期参加者では、思考の整理になったという人が 3 名も見られることから、参加直後は気づきにくいけど、後に実感できる成長もあるようだ。

また、図 2-12 の視点の変化を見てみると、初期参加者では、目につくものが変化したと答えた人が多い他、その他の中には「専門家としての責任が芽生えた」と答えた人もいた。近年の参加者では、価値観や研究テーマと言った大きな変化が見られる。

2.5 現在の職業、研究への影響

現在の所属別に分け、活動参加が職業や研究にいかに関わっているのかを聞いた。以下、いくつか例を示す。

建築、都市関係の職業

- ・様々な人と広く関わることが多いのは仕事でも同様。
- ・探検からアウトプットに至るプロセスが設計行為と同じ流れ
- ・目標を設定し、設定した目標を達成するために、段階的に課題を設定して実行していくプロセス、相手と考えを共有する力は何にでも生きてくる。

博士課程

- ・子どもたちに還元していくことの重要性は以前から感じていたので、今後もその方法を考えながら研究や仕事をしていきたいと思う。
- ・非専門家への伝え方、非専門家の視点を考えるようになった。
- ・伝えるためには自分自身のクリアな思考が必要だということに気づき、その訓練が他地域での活動に活かしている。

修士課程

- ・やりたいことに積極的に参加し、きちんとやり遂げることができたことが財産となった。
- ・自分の素直な興味から、学術的テーマに発展していくこと。研究の原点になった。
- ・ユーザーの目線が気になる様になった。
- ・フィールドワークの基礎となる、まちを実際に見ることの面白さを知った。

建築、都市関係の職業について人では、多くの人の理解を得て一つのものを作りが得るプロセスが仕事と同様であり、方法面で活かしていると答えた人が多い。博士課程の中には、研究への意識、視点と答えた人もおり、修士課程ではやり遂げたことによる自信や研究テーマの発見といった基礎的な力をつけたようである。

2.6 小結 活動参加による学生への影響

2.6.1 参加者の属性別

たとえ最初は頼まれて参加した学生でも、活動を通して問題意識を顕在化でき、新たな視点を得ることが出来たと言える。一方、自主的に参加した学生では、元々問題意識やテーマを持っているため、活動参加によって、テーマに対する理解を深めたり、新たな側面を知ることが出来る。

修士課程学生は、活動が新たな視点、研究テーマの発見につながり、博士課程学生では、思考の整理や研究テーマの新たな側面を考え等、意識の面で成長が出来た。

2.6.2 参加年次別

参加年次別の比較より、アウトリーチ活動参加直後に感じる方法面での成長等の短期的な効果と、参加経験が後に思考や意識に影響する等の長期的な効果もあることが分かった。また、活動参加経験が研究や仕事にも活かしているといえる。

3 章 小学校側から見た活動評価

3.1 アンケート方法

2010 年 11 月に、2009 年度担任の田内先生、2010 年度担任の岩佐先生へのアンケートとインタビューを行った。アンケート内容は主に以下の 4 点である。

- ・活動を行って良かった点
- ・活動を通して、児童の変化
- ・活動に対する、先生方の意識の変化
- ・活動の改善すべき点

また、このアンケートを元に短時間のインタビューも行い、補足して聞いた。以下、重要と思われる記述を抽出し、小学校側からの活動評価を分析する。

3.2 児童の変化

3.2.1 活動を通しての成長

2009 年度担任

- ・ほぼ全員の生徒が、「楽しい」と感じており、探検の授業を楽しみにしていた。
- ・広い場所、多くの人々の前で自分の調べたことを発表できるという機会を与えられ、自信をつけた。初めてみるような、子どもたちの楽しそうな表情を見た。
- ・子ども一人ひとりに活躍の場が与えられるので、そのよさを引き出す場面が増えた。
- ・東京大学への興味がわき、学習意欲の向上にもなっている。
- ・当初は、ただでさえ足りない授業時間を 40 時間もとることに不安が大きかったが、普通の授業では不可能な、時間をかけてじっくり考えることができて、貴重だった。

2010 年度担任

- ・普段出来ない原稿を覚える作業、人前で発表する、人に伝えるという経験を通して自信をつけた。
- ・大学院生、様々な人との関りを通して、子どもたちが様々な考え方に触れた。
- ・探検を通して、見知らぬおじさんや警察官、様々な人と交流を持つことができた。
- ・地域の活性、交流にもつながっていると感じる。

3.2.2 児童の都市、建築に対する興味

2009 年度担任

- ・隊長さんの明確な課題や、細かな配慮があったチームでは、調査した場所を見るたびに、その場所に対しての思い出を語る姿が見られた。
- ・まちを歩きながら、「つぎはぎだ」「すきまだ」と口に出しているのをよく耳にした。
- ・卒業文集に探検隊の授業について書く子どもが多い。

その文中では、「これからも住み続けたい」「上原のまちの良さを発見、再確認した。」

「このすきまに人口の緑を植えたい」「まちににぎわいをだす方法は他にないかな」

「人にやさしい上原のまちにしたい」等皆が自分の意見を述べている。

2010 年度担任

- ・具体的な変化は言葉に出来ないが、感触として興味や愛着を持ったと思える。
- 探検時の資料やファイルを大切にもっている、探検時のキーワードを発するなど、子どもたちなりに探検成果、自分たちのチームの視点への愛着があるようだ。

3.3 改善すべき点

2009 年度担任

- ・学校には予算があること、決まりがあることをしっかり理解してほしい。
- ・ことばづかい、坐り方など、基本的な教育事項は守ってほしい。
- ・隊長の方のリーダーシップに差があり、子どもたちがどんどん成長していく班もある反面、その逆もあった。
- ・担任の先生として、すべきことを明確に教えてほしい。
- ・コーディネーターは小学校と連絡を密に取り、隊長は、明確なビジョンをもってほしい。

2010 年度担任

- ・グループごとの内容の差が大きい、まとめ方がグループごとにちがう。
- ・保護者へも事前に通知しなくてはならないので、計画的にしてほしい。
- ・学生の言葉遣いや態度、小学校は教育の場でもあることを忘れずに。
- ・指令を具体的にしてほしい。
- ・普段の子どもたちの生活に置き換えて考えることが出来るような提案をしてほしい。
- ・時間数と活動場所の確保、材料準備が大変だった。

3.4 小結

小学校の先生方のアンケートとインタビューから、本活動を通して小学生にも、自信をつけた、自分の力で考えるようになった等の成長が見られたこと、都市や建築に対しても何らかの愛着や興味が生まれていたことが分かった。

その一方で、子どもに分かりにくい内容があったり、小学校の基本的なルールが守れていない等、学生と小学校との価値観の差異も判明した。これまで学生視点で、学生が小学生との共同作業を通して実社会の視点を学ぶ意義ばかりを考えてきたが、本活動は実際の小学校の授業として行っているため、活動開始前にあらかじめ、最低限のルールを徹底することや小学生の視点の調査を行う必要がある。また、チームごとのレベルの差や、進め方、まとめ方の差も、学生の専攻や性格の差であるため、指導、統一することは難しいが、小学校の授業であることを考えると、活動コーディネーターがある程度のレベルの担保と調和を図る必要もあることが分かった。

4 章 結論

4.1 まとめ

活動への参加によって、学生にはコミュニケーション力や企画力が向上する等の方法面だけでなく、自身の研究テーマへの理解促進や思考の整理ができるといった研究への直接的な効果があることが明らかになった。また、その効果の中には、参加直後に体感する短期的な成長の他に、数年後に実感できる長期的な効果もあり、それは、以降の研究生活や仕事の中でも生きていた。つまり、専門家（学生）と一般社会をつなぐ一つの方法として、特に、交流を通して互いに成長するという観点で学生がアウトリーチ活動に参加することは有効であると言える。

また、活動を行った小学校の子どもたちにも成長が見られ、一般市民へ専門知識や視点を伝えることの成果も明らかになった。その一方で、学生との価値観や意識の際から小学校に負担をかけていたことも判明した。成長するためには失敗や相手への迷惑が伴うため、その部分をフォローし、伝える内容が正しいものか、価値あるものなのかを客観的に吟味、調整できるコーディネーターが必要である。

現在、まだアウトリーチ活動という言葉も普及しておらず、ごく一部の意欲的な専門家（学生）しか企画、参加していない。本研究で得た成果のように、アウトリーチ活動は専門家（学生）にとっても意味のあるものであることを伝え、現在のアウトリーチ活動が持つ「研究の片手間、PRを行う、ボランティア」といった印象を払拭し、「新たな視点の獲得、思考の整理、コミュニケーションスキルの向上」という印象を持ってもらいたい。そして、自らも学ぶ、研究の一環となるような活動として広く普及して欲しいと考えている。

4.2 今後の活動

私は今後、この研究結果を元に「参加学生のメリットの明示」、「本活動のマニュアルづくり」を行い、「ぼくらはまちの探検隊」活動の改善と、普及を行おうと考えている。

現在のこの活動運営の問題点として、参加学生の募集が困難であることと、活動コーディネーターの負担が挙げられる。本研究で明らかになった参加することによる成長、研究への効果を明示することによって、参加学生を募る際の一助としたい。そして、本研究で示したように、参加学生は活動を通して成長することが出来るが、活動を統括するコーディネーターは、各参加者への注意や相談、材料の発注といった事務的な調整に終わってしまう。ある程度の日程、するべき作業をマニュアルにすることで、その負担の軽減を図りたい。

また、他研究室からもぜひやりたいとの声があるが、小学校との連携が難しく、なかなか実現できない現状がある。活動普及への第一歩として、マニュアルの中で、活動内容、小学校側の負担、先生のすべきことを明確化することによって、理解を得る一助となると考えている。

∞1 謝辞、あとがき

本プログラムの志望動機から、講義での議論を通して、私は一貫して「専門家→社会」の必要性を主張してきました。そして、そのひとつのきっかけとして、アウトリーチ活動というものが閉鎖的な専門家社会と一般社会との接点として重要なのではないかと考え、本研究となりました。小さな活動の一例ではありますが、専門家（学生）が活動によって社会に目を向けることができるようになったという成果を得て、締めくくることが出来て本当に嬉しく思います。

恥ずかしくも、「インタープリター」という言葉を知ったのは、本プログラムへの応募の際でした。大学の環境と社会との接点に関して漠然と悩んでいた私に、「なんだか原田さんに向いてそうなものがあるよ」と勧めて下さった本専攻の教授の村松さん、本当にありがとうございました。あの一言が私の将来を大きく変えたきっかけになったと言っても過言ではありません。

そしてインタープリター5期生の仲間たち、皆の研究に対する熱い思い、毎日忙しく飛び回っている活発な姿は本当に刺激になりました。こんなに、様々なバックグラウンドを持った皆と会い、議論できる機会はこれまでありませんでした。今後、それぞれの道に進み、おそらく各世界の第一線で活躍していくでしょう。5年後、10年後皆で集まって、もっと深い議論が出来るようになることがとても楽しみです。また、1〜4期の先輩方には、人生相談から研究の両立方法など様々なことを教えて頂きました。そして、先輩方のインタープリターとしての熱い思いと活躍に、常に刺激されてきました。

お世話になったインタープリターの先生方、本当にありがとうございます。これまで建築という狭い世界でしか学んでこなかった私にとって、先生方の視点や鋭いご指摘は刺激的でした。他の皆と比べて、科学的、論理的な思考が未熟であった私ですが、この1年半を通して、僅かながら成長できたと思っています。

最後に、お忙しい中親身になってご指導してくださった指導教官の黒田先生、どうもありがとうございました。研究についてだけでなく、建築についても、先生とお話した時間はとても楽しく、いつも話が弾んであっという間におわってしまいました。また、365日24時間、澁刺と世界を飛び回っている先生のお姿はとても素敵で、憧れでした。とても手の届かない目標ですが、少しでも先生のように素敵な女性に近づけるように頑張ります。

∞2 インタープリター養成プログラムを通して

私は、幼い頃から建物や街並みが好きという一心で建築学を専攻してきました。しかし、大学に入り、毎日写真、模型とパソコンとばかり向き合うという環境が余りに閉鎖的であることに不満と危機感を抱くようになり、「人々の生活する都市をつくる役目の建築学生が室内に籠り、実社会を知らない。“オシャレ”という一般の人々のイメージに甘んじているのではないか。」建築の学生、専門家が実社会に触れるきっかけを作りたい。そんな思いから、インタープリター養成プログラムに応募しました。

参加したことによる一番の収穫は、将来像の変化と覚悟です。応募当初の私は、先述したような専攻分野に対する閉塞感から、建築の世界を抜け出し、外側から建築分野に関わるコミュニケーターになりたいと考えていました。本プログラムを通して、実際に建物を建てたことも無い今の私では“建築分野の問題点”など何も分かっていない、伝える前に、まずは知らなくてはならないということ、そしてなにより、私は建築が、都市が大好きなのだとすることを改めて痛感し、建築の専門家になることを心に決めました。そして、建築の真髄が一番学べる現場で修行する覚悟が出来ました。

本プログラムを通して、一番かけがえの無いものだと感じているのは、先生方、参加学生と出会ったこと、そして皆と議論した時間です。様々な分野の第一線で活躍している方々、研究を貫いてきた方々の姿勢や考え方に触れ、建築学生の閉鎖性を嘆いていた自分自身の視野も狭かったことを知り、自身の意識や価値観を客観視し、社会の中で位置づけて見ることが出来るようになりました。また、研究について楽しそうに、活き活きと話す皆を見て、問題点を探すだけでなく、その分野がいかに社会を支えているのかというプラスの視点からも物事を考えられるようになったことも大きな収穫でした。

私は今後、建設の現場で働きます。インタープリターとして将来建築分野のかけはしとなるため、建築に関わるすべての人と会い、建築が誕生する過程を体感したいと思い、設計者や研究者ではなく、この道を選びました。具体的な形は未だ見えていませんが、今後もずっと建築の世界の中で学び、その世界の中から、建築分野の人々の意識を少しでも実社会に向けることをしていきたいと思います。

仕事では、建物の建つ地域の人々、設計者、実際に作る職人、エンジニアといった建物に関わるすべての人と理解しあい、まとめていくこと、既存の建物が解体される場面から、新たに建物が生まれ、10年、20年経過して修理が必要になるまで建物と向き合っていくことになります。閉じた現場社会、多忙な業務に埋もれることなく、インタープリターとしての広い視野を忘れずに、まずは建築を体得していこうと思います。

【参考文献一覧】

文部科学省『平成 19 年度版科学技術白書 科学技術の振興の成果—知の創造・活用・継承』

「ワークショップと建築家の役割」 『新建築』 第 77 巻 8 号 2002

村松伸「大きな地球の木下で」 『ソトコト』 木楽舎 2 月号 no.68、4 月号 no.70、7 月号 no.73、8 月号 no.74 2005

大島まり「出張授業にみる科学コミュニケーション」 藤垣裕子・廣野善幸編『科学技術コミュニケーション論』 東京大学出版会 2008

JST「研究者情報発信活動推進モデル事業」 <<http://rika.jst.go.jp/outreach/top.htm>>(2011 年 2 月 25 日アクセス)

JIA「ゴールデンキューブ賞」 <<http://goldencubejapan.com/index.html>>(2011 年 2 月 25 日アクセス)

【付録】

- ・ 指令一覧
- ・ アンケート見本
- ・ アンケート結果一覧

年度	指令(探検テーマ)	着目する要素	探検手法	仮説・都市に関して解明したい点	成果物
2004&2005	まちの中心になるへそを探せ	風景	風景を見る	風景の感覚の違い	大切な場所をつくる
2004&2006	このまちのおばけを探しなさい	制度?	目には見えないもの	?	?
2004&2007	まちの建物に隠された暗号を解け	建築	建築(都市)	?	?
2004&2008	探検で休める場所を探しなさい	場(風景)	?	?	すぐく
2004&2009	まちにさわるう	モノ	関係している	都市のモノが(素材)の変化している。その理由(さわる)を	型を取る
2004&2010	このまちの凹凸を探しなさい	地形	凸凹(地形)をみる	街は、パースナルな平面ではなく、凸凹のある実体空間である	階段全集
2004&2011	このまちをよく知るための探検地図を手せよ				
2004&2012	まちの時間を捕まえる	建築物	古いモノの価値観	建築(都市)は時間的に変化していて、その記憶、ものを継承する必要がある	テラシート
2006	まちの「ガイコク」を探しなさい	モノ(建築)	都市の人をみる(ガイコクのもの)	都市の人の動きの変化	国旗
2006	このまちは変化し続けている、その秘密をあばきなさい	自然をみる	変化と変身	自然物の時間的変化	紙芝居×
2006	まちのペースナイを探しなさい	歴史事項	町の人、歴史を聞く	都市は止まっではない、時間的推移している	年表、俳句
2006	みんな違ったマメガナをかけている、色んなメガナをウ	風景	建築(都市)をみる	建築(都市)を見る見方は、異なっていることを伝えあう	
2006	まちに隠れた友達を探しなさい	場	大切なもの・場所	都市の感覚の違い	?
2006	ほくらはまちの催眠にかかっている、催眠術師をつかま	?	都市をみる		
2006	まちのカーテンを探しなさい	街の守り手、障害物	擬人化する	まちには障害も安全もあるが、それらには役立つときと、そうでないときがある。	命を、人形を作る
2007	まちの味を探しなさい	建築物	味の感覚的表のようにまちを評価	モノの価値観の違い	味覚で評価
2007	まちの家系図をつくりなさい	商店	商店の盛衰を追う	都市は時間的に変化するが、理由がある	家系図を作る
2007	まちに隠れた演奏者を探しなさい	音(日常)	音を捉える	都市にはさまざまな音があり、それが町のアイデンティティになろう。	CD
2007	まちに隠れた顔を探しなさい	地形	地形を顔に見立てる	土地も時間的に変化し、それには人間活動がかかわっている	町の顔を作る
2007	まちの開花を告げなさい	出来事	周期性の重要性	人の活動には周期性があり、それに参加することで、都市を活性化できる	みこし、イベントを作る
2008	まちをマッソージしなさい	外部空間	まちを家に見立てる	外部空間の価値	まちを家にする
2008	まちの転校生を探しなさい	名前の変化	名前の移動履歴を追う	都市はひとの移動の産物である	?
2008	まちのカルテをつくりなさい	食の変化	食と移動の関係	食の変化によって都市の変化していることを解明する。(相互関係でもある)	関係図
2008	まちの落とし物さがせ	建築物	ゴミの動きを追う、ゴミとは何かを考える	都市は循環している、価値観は異なる	個人の価値判断
2008	まちの住民を探しなさい	生態系	生態系のバランスを追う	生態系の時間的変化を解明する	バランス系図
2008	まちのにおいをつくりなさい	匂い(日常)	匂いを嗅ぐ?昔の匂いをインタビューで復元	都市は変化している、(匂いという)記憶の継承の重要性	ニオイの配練物
2009	まちとほくらをききすなで結びなさい	場所	思い出を探る	それぞれの場所と自分たちとの関係の深さ、よい関係とは	きずなを可視化
2009	坂のお客さんをふやしなさい	地形	坂の特徴を調べる	坂それぞれの特徴、使い分けられている	坂の広告
2009	まちに安心の花を咲かせなさい	人間の行為	安心と不安の元を探す	まちは人の活動で守られている	安心の花マッゾ
2009	川のふたをあけなさい	川	川の痕跡	上原には昔たぐさんの水辺空間があった	川の再現
2009	まちのなわばりをみつけないさい	人の集団	まちの人びとにインタビュー	まちは様々なコミュニケーションがある	縄張図
2009	まちのアラセサリーをみつけないさい	看板、装飾	看板や溢れ出し	様々な要素がまちに賑わいを生み出している	まちのアラセサリー
2010	まちの幽体離脱をさがしなさい	地形と建築	地形を活かしたデザイン	地形を活かすと、良いデザインも生まれる。	オリジナルデザイン
2010	LIVING GREENを詠しなさい	植物	人工的緑と自然の緑との関係	緑との関わり方が変化してきた。	緑の模型
2010	まちのルールをつくりなさい	看板、住民意識	見えないうルールを把握	人々の意識と思いやりでまちが成立している。	新たなルール
2010	まちのつぎはぎをみつけないさい	工事、建物、土木構造物	構造物の新旧の境目を観察、分析	絶えず人々の手によって更新されるながら街並は生まれている。	つぎはぎ模型
2010	まちのすきまを着せ替えなさい	隙間	隙間の使い方を調べる	まちの使い方は住民次第である。	隙間デザイン
2010	まちの骨格をみつけないさい	道	道の特徴や、関係	道にはまちの特徴がよくあらわれている。	道デザイン
2010	まちの給食をつくりなさい	商店、田畑	食を通して他地域との関係を見る	私たちの生活は自分のまちだけでは完結しない。	上原の給食

アウトリーチ活動参加による参加者の意識変化に関するアンケート

※ 選択式になっている項目もございますが、ふさわしい選択肢がない場合は、ご自由に記入して下さって構いません。また、複数選択をして下さって構いません。

※ 選択理由を出来る限り具体的に記入して下さい。

1. 属性について

- ・ 現在のご職業、所属を教えてください。

--

- ・ 参加年（隊長を務めた年）を教えてください。

--

2. 参加理由について

- ・ なぜ“すこゆる”に参加しましたか。

- | |
|--|
| <div>1. 教授に頼まれて</div> <div>2. アウトリーチ活動やワークショップに興味があった</div> <div>3. 研究生活だけでは足りないものを感じていた</div> <div>4. その他</div> <div>(具体的に</div> <div>)</div> |
|--|

- ・ “すこゆる”以外にも、アウトリーチ活動に参加した経験はありますか。

(YES/NO)

YES と答えた方は、活動名や概要等を教えてください。

- ・ 指令は何にしましたか、何を伝えたいと考えて指令を作りましたか。

(指令：	)
理由	

・ 探検参加によって、新たな発見や自分の成長はありましたか。

1. 子どもから新たな視点を得た
 2. 責任感を意識した
 3. 伝える力、コミュニケーション力が向上した
 4. 思考が整理された
 5. 子どもへの接し方が上手くなった
 6. その他
- (具体的に)

・ 探検前と後で視点や、考え方に変化はありましたか。

1. 特に変化はない
 2. 様々な側面を考える様になった
 3. 目につくものが変わった
 4. 好きな都市像、建築像が変わった
 5. 研究テーマが変わった
 6. 自分の将来像が変わった
 7. その他
- (具体的に)

4. 現在について

・ 活動への参加が今の研究や仕事に活きていると思いますか。どの様な形で活きていますか。できる限り具体的に教えてください。

1. 思考力
 2. コミュニケーション能力
 3. 現在の職業や、研究テーマに繋がった
 4. その他
- (具体的に)

ありがとうございました。

本結果は、私が責任を持って集計、分析し、お名前は伏せて研究に用い、結果のみ学術目的で公開させていただきます。

	参加年度	当時の所属	現在の所属	参加理由	フューリーチ 活動経験	活動採点	やり直したい 変えたいこと	活動成果	活動中 の困難	活動に よる成長	視点の変化	現在への影響
	1	2005 東京大学建築学専攻修士課程	建築設計									
	2	2005 東京大学建築学専攻修士課程	不動産	2	no	10	2	yes	2.4	1	1	1
	3	2005 東京大学建築学専攻修士課程	研究職	1.4	yes	70	5	yes	2.4	1	2.3	2.4
	4	2005 東京大学建築学専攻修士課程	研究職									
	5	2005 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1	yes	50	1	yes	3.4	2	7	2
	6	2005 東京大学建築学専攻修士課程	建築設計									
	7	2005 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程									
	8	2005 東京大学建築学専攻修士課程	研究職									
	9	2006 他大学建築学専攻修士課程	建築関係									
	10	2006 東京大学建築学専攻修士課程	建築設計	4	no	30	4	yes	4	5	3	4
	11	2006 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1	yes	80	4	yes	2.4	4	2	4
	12	2006 東京大学建築学専攻修士課程	建築設計	2	no	70	4	yes	4	3.5	7	1
	13	2006 他大学建築学専攻修士課程	建築関係									
	14	2006 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1.2	no	70	0	yes	2.3		7	1.2
	15	2006 東京大学都市工学専攻修士課程										
	16	2007 東京大学建築学専攻修士課程	広告									
	17	2007 他大学建築学専攻修士課程										
	18	2007 東京大学建築学専攻修士課程	都市計画	2.4	yes	70	0	yes	3.4	3.4,5	3.7	1.2
	19	2007 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1.2	yes	70	5	yes	1.2	5	3	2
	20	2007 東京大学建築学専攻修士課程	研究職									
	21	2008 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程									
	22	2008 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1	no	60	0	yes	2	1	7	4
	23	2008 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	2	yes	75	2	yes	1.4	5	2	3
	24	2008 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1	yes	70	1	yes	2	0	7	2
	25	2008 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1	yes	90	4	yes	2	2.3	2.5	1.2
	26	2008 他大学建築学専攻修士課程	不動産	4	yes	60	2.3	?	1.2,4.5	5	1	3
	27	2008 東京大学建築学専攻修士課程	テレビ局	1.3	no	60	3	yes	2	2	3.4	1.3
	28	2009 東京大学都市工学専攻修士課程	修士課程	4	yes	90	3	yes	2	0	3	4
	29	2009 東京大学都市工学専攻修士課程	修士課程									
	30	2009 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1.2	yes	90	3	yes	1	1.3	4.5	1.2,3
	31	2009 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1	yes	20	2	yes	1.2,3,4,5	3	2	1.4
	32	2009 東京大学4年	修士課程	2.4	yes	50	4.5	yes	2.3,4	2	7	3
	33	2009 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	1.4	no	80	2	yes	3,4	2	2.3	1.2,3
	34	2010 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程									
	35	2010 東京大学建築学専攻修士課程	建築設計									
	36	2010 東京大学都市工学専攻修士課程	修士課程	3	yes	60	3	no	3,4	2,4	2	1, 2
	37	2010 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	2,3,4	yes	70	4	yes	2,3,5	2,3	2,7	1,2,3,4
	38	2010 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	2	no	75	2	yes	1	5	4	1
	39	2010 東京大学建築学専攻修士課程	修士課程	2	yes	50	2	yes	1	0	3	1
	40	2010 他大学建築学専攻修士課程	修士課程	4	no	80	1	yes	2	3	7	2